

私にだけ悲しみが限りなく深いように思えてならない。

「2 太宰府謫居二期（延喜元年（九〇一）初冬〜延喜二年（九〇二）早春）」

この期の作品としては「487 東山小雪」から「495 梅花」を想定している。この時期、延喜元年の冬を迎える頃から道真の詩風に変化の兆しが見えて来るように思う。具体的なこの時期の道真の詩の傾向として次の二点を指摘することが出来る。「1. 太宰府謫居一期」時に詠まれている作品群に比して道真自身が精神的に或る種の安定が見られるようになったことが大きいと思われるが、「自然の事物」を「事物」として見つめることが出来るようになり、その「事物」に「自己の感情移入」をはかる作品が目立つようになる点が、まず一点目である。そしてその「自己の感情」とは、主に「望京の念」と換言してもよい。そして二点目は、道真の得意とする「見立て」の技法を駆使する作品が目立つ点である。ここにも道真の「詩人」としての自負、執念なるものが或る種の安定期を迎え、表出した事象と言い換えられるかもしれない。

前者の「事物」に「自己の感情移入」をはかる作品の具体例として、既に後藤昭雄氏が詳細に考察されている事例だが、⁽⁸⁾「490 雪夜思家竹」で謫居での雪を目のあたりにし、京の自宅の竹の様を思い起こし、十三・十四句で「抱直自低迷／含真空破裂（竹はまっすぐに伸びる真直ぐな心を抱きつつも自ら（雪の重みで）低く地に倒れ伏している／竹はひたぶるな貞節（秋冬にも色を変えない。心変わりしない）な心を抱きつつ（雪の重みで）二つに割れてしまっている）」と詠み、二十三・二十四句で「縦不得扶持／其奈後凋節（たとえ私という主人がなく、誰もあの雪に折れた竹を支えてやることはできなくても／松柏とともに凋みに後れる竹であるお前の貞節な心は（囲りがどうであろうと、主人がいようがいまいが）いつまでも不変でいてくれるはずである）」と詠む詩句に